

Title	アイルランド神智学徒のアジア主義？ジェームズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波
Author(s)	橋本, 順光
Citation	アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究：日英間に広がる21世紀の地平：日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」. 2013, p. 27-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76031
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

アイルランド神智学徒のアジア主義？

ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波¹

橋本 順光

はじめに カズンズ、神智学協会、黒龍会

島崎藤村の「市井にありて」(1930)には、軍隊生活を経験して、ひょっこり主人の元にやってきた音楽家と雑談を繰り広げる、「ある日の対話」という作品が収められている。整然とした古典音楽とは違って、不協和音を基礎としたドビュッシーやスクリャービンは、「ととのっていないように聞えるかもしれないが、しかし何か我々の魂に近く生きた音」をもっていると述べて、客は以下のように話題を続ける。

客 御存知ですか、イエーツなどと一緒にアイルランドの詩人で、カズンズという人のいるのを。

主人 さあ、ちよっと思い出せない。

客 そうですか、昔、慶應義塾の先生をしていたこともあります。この頃はインドのセオソフィー大学の総長をしています。先達てアメリカへ行った帰り道、日本へよってくれました²。

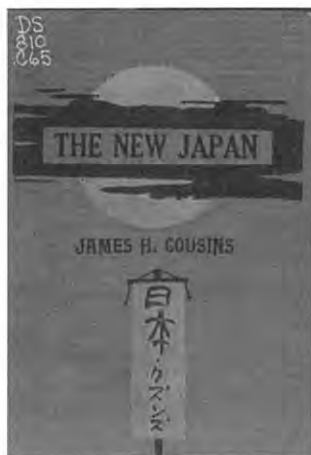
このカズンズこそ、1919年から翌年にかけて日本に滞在したジェイムズ・カズンズ(James H. Cousins)である。アイルランド出身の詩人であり、セオソフィー(Theosophy)こと神智学に入れ込み、インドへ渡って、神智学協会のアニー・ベザント会長の片腕として働いた。文中にもあるセオソフィー大学とは、南インドのマダナパレ(Madanapalle)にあるセオソフィカル・カレッジのことだが、そこで教育に携わり、慶應義塾大学に招かれて英文学を教えたのだ。早くも1930年の段階で知る人ぞ知る存在になっていたわけだが、カズンズはわずか10ヶ月の滞在中、多くの人々に出会い、そして多くの人々を結びつけることになる。なかでも重要なのは、神智学協会の東京支部を設立したことと、アジア主義で知られる黒龍会に乞われて、英文雑誌『エイジアン・レビュー』(*Asian Review*)の編集顧問に就任したことであった。本稿では、カズンズの半ば忘れられた日本での足跡とその余波をたどることで、彼とアジアの関わりを考えたい。

カズンズと野口米次郎

ジェイムズ・カズンズがインドから神戸へ上陸したのは、1919年5月28日のことである³。慶應義塾大学へ招聘したのは野口米次郎といわれるが⁴、カズンズの回想録を信じるならば、野口とその友人であったインドの女性詩人サロジニ・ナイドゥが「共謀」してのことだという⁵。すでに上海で日本の大手新聞記者二名から船中での面会を求められ、「珍無類の英語で」インタビューをされたカズンズは、「まだそう名前も世界に響いていない詩人に過ぎない」自分がかくも名士扱いされるのをいぶかって、野口にその西洋崇拜ぶりにあきれたと書き送っている⁶。そし

て上海に上陸すると、どこから聞きつけたのか、慶応の出身者に迎えられ、彼が赴任する慶応の由来を聞かされ、歓迎会で初めて日本料理を口にし、「日本の宣伝網即ち報告機関は微に入り細を極めている」ことを思い知る事となった⁷。そして電車では無遠慮な乗客が多いことに驚き、とりわけ日本人女性について、その短所を覆い隠す格好の着物ではなく洋服を着ていると嘆き、思い描いていた夢の国とはほど遠い現実に失望して東京駅に到着したのだった。

しかし、その東京駅ではただ野口が出迎えるのみであった。それゆえ野口は、上海で大詩人のように喧伝されただけに、何の歓迎もないのに拍子抜けしたのではないかと、記している。つまり、新聞記者たちはあくまで雑報の埋め草に上海埠頭でカズンズを取材しただけであることに、気づいていないのではないかというのである。実際、カズンズは、こと自身が書いた記事や回顧録のなかでは、自分がひとかどの詩人として日本で迎えられ、同人雑誌での翻訳を通じて「かなり有名」だったことを誇らしげに記しており、そうした「宣伝網」の実情に気づいた気配はない⁸。なおカズンズは日本滞在記『新日本』(1923)で、和服で下駄姿の野口を期待していたら、英国風の「粗末な」スーツに山高帽という「醜い不釣り合い」ぶりで、これこそが「新日本」なのではないかと書き記している⁹。そんなよそよそしいカズンズの記述をみると、二人はどうやら初対面であったのかもしれない。一方、こうした『新日本』での当てこすりの意趣返しなのかどうか、野口は野口で「私は現代日本の風景を切る」(1928)という随筆で、大詩人扱いされた真意が読めないカズンズの不見識を皮肉っている。カズンズの日記を引いて、野口は日本の舶来信仰を批判するものの、かかいう野口こそがそんな「新日本」の風景の典型として真っ先に風刺されていることについて何も記すことはない。



A JAPANESE POET'S SMILE (RIGHT)— PAGE 36

図1 左カズンズ『新日本』書影
右同書所収の野口宅でくつろぐカズンズと野口米次郎

こうして東京駅で野口と会ったカズンズは、野口宅へと行き、しばしば彼らの世話になることになる。おそらく武田まつ子のことであろう夫人のことや、彼女に振る舞われたお茶についての記述は貴重な記録といえるが、紙幅の関係で、ここでは長女の一二三とのことだけを紹介しておこう。週末に過ごした野口宅で、カズンズは長女の一二三に英語を教え、彼女はカズンズに日本語を教えたそうだが、その「ヒフミ」のおかげで数の数え方を覚えたというのである¹⁰。図1は『新日本』の書影と「日本の詩人の微笑」というキャプションのついた二人の写真だが、なるほど野口の笑った写真はなかなか珍しいとカズンズ自身が誇るように、家族同様にくつろ

ぐ二人の親密な関係が読み取れよう。1919年の秋、野口はアメリカへ講演旅行に出かけてしまうのだが、それまでなにくれとなく彼の面倒を見たのだった。

しかし、野口はアイルランド文芸運動や評論のなかでカズンズに触れはしても、その詩を訳したり、言及したりしたことはなかったようだ。またカズンズも、野口の詩をことさらに賞賛した形跡はみられない。唯一の例外として、カズンズは『新日本』で野口の詩句として ‘oh! my beloved, / We shall fly in heaven.’ を引用しているが、それは優れているからという理由ではない。あれだけ英語を学び、英米の作家達と交友がある野口でさえも、多くの日本人同様、何度矯正しても ‘oh! my berubbed, / We shall fry in hebben.’ と発音してしまうと、その講演の準備を手伝わされた苦心談として紹介しているにすぎないのである。

日英外交文書にみるカズンズの経歴とインド

では、そもそもカズンズとはどういう人物なのか、ここで簡単に紹介しておこう¹¹。1936年作成の日本の外務省情報局による「極東問題を論評する主要外国人」によれば、

ジェー、エイチ、カズンズ在「マドラス、マダナバレ」大学並に在「マドラス、アヂアル」神智学会に属す愛蘭人にして詩人、芸術家、批評家、教育家、哲学者たり、日本慶応義塾大学の文学博士、京都大学に詩学の教授たりしことあり、著書多く「新日本」及「亜細亜の文化的統一」等を著す¹²。

ほぼ正確な記述だが、マダナバレというのは、先のマダナバレのことだろう。アヂアルは、アヂヤールのことだが、京都大学での教職歴はいまだ確認が取れていない。また「新日本」は前述した『新日本』(1923)であり、「亜細亜の文化的統一」は、*The Cultural Unity of Asia* (1922)のことと思われる。

神智学会とは、先のセオソフィーと同じく、1875年設立の神智学協会を指している。創立者ブラヴァツキー夫人の霊媒にまつわる詐欺行為は悪名高く、東西の宗教が相一致するという教えは典型的なオリエンタリズムといえるかもしれない。しかし、秘教的仏教を自称したこともあり、1879年にアメリカからインドへ移動して後は、インドや日本の仏教復興運動ないしアジア主義を刺激することとなった¹³。実際、日本ではブラヴァツキーのパートナーであったヘンリー・スティーブル・オルコットが1889年と1891年来日し、仏教の変革運動と関わっている¹⁴。オルコットの死後、1907年には、アイルランド自治運動家であったアニー・ベザントが二代目会長となり、ベザントはインドの自治運動にも深く関与するようになっていく。したがってカズンズの来日は、これまで仏教の活性化に触媒のように援用されてきた神智学が、逆に下部組織を日本に設立したこと、そしてその組織がインド自治運動という当時の難問に理解があったこと、という二つの点で大きな意味を持つ。しかし、そのような記述はここには見られない。経歴で紹介されている肩書きの数からも明らかなように、カズンズの著作は多いのだが、そのなかで「新日本」と「亜細亜の文化的統一」の二点のみを特記しているところに、日本の情報局の関心と規定をうかがうことができよう。

一方、英国外務省が1920年2月に作成した秘密文書もまた、英国にとってカズンズがどのようにみられていたかを示す経歴紹介になっている。

1873年、ベルファスト生まれ、24歳でイエイツ、ラッセルのアイルランド文芸運動に参加。

戯曲や詩を書き、新興の学問をアイルランド古来の伝統に吹き込む。1913年にアイルランドからイングランドへ渡り、1915年にベザント夫人に招かれてインドで『ニュー・インディア』紙の編集長となる。(中略) 1919年7月にインドから日本へ渡り、慶応大学で英文学教授となるも、いまは職をなげうって『エイジアン・レビュー』の共同編集長になった模様¹⁵。

前述のように、この『エイジアン・レビュー』は黒龍会発行の英文月刊誌であった。すでに指摘されているように、黒龍会のようなアジア主義団体がインドの独立やその運動家を支援していることに、英国政府は神経をとがらせており、複数のインド人エージェントに調査させるなど、諜報活動を行っていた¹⁶。こうして日英関係ひいては日英同盟に大きな亀裂が入っていくのだが、その関係からカズンズも要注意人物として言及されたのだと思われる。ただここでは幾分の誇張があって、カズンズは『エイジアン・レビュー』の共同編集長(joint editor)ではなく、誌面の記載によれば文芸特派員(Literary Correspondent)とあり、カズンズにとってもせいぜい顧問(adviser)くらいでしかなかった¹⁷。また慶応大学での教職は継続しており、正確にいえばカズンズの出発も1919年の7月ではなく5月である。こうした不正確な記述が偶然なのか意図によるものかは不明だが、アニー・ベザントに続いてアイルランドの愛国者が、インドの自治や独立の機運を刺激することへの強い警戒と、そうした人物が日本のアジア主義者と接近する危険性を強調したいことは、十分に行間から伝わってくるだろう。

『新日本』によれば、カズンズは、1920年3月28日には離日してしまうので、その滞在はわずか十ヶ月ほどでしかない。それにも関わらず、日英双方の機密文書に登場して特記されていることが示唆するように、カズンズの来日は、日英そしてインドに、無視できない足跡と波紋を残すこととなった。カズンズは野口に日本の「宣伝網」には半ばあきれたと書き送っているが、カズンズもまた、インドとアイルランドに広がる神智学と詩人の広汎な人脈を持っていた。そして野口には、ナイドウ、イエイツといった、カズンズが敬愛する共通の友人がおり、英国への反感とインドへの共感とを共有していた。たとえば、野口は1916年12月31日付けの『ジャパン・タイムズ』に日英同盟批判を寄稿しており、英国政府の文書には、この切り抜きを引いて、野口の英語には過ちがひどいが、一般の日本人には非常な影響力があるので注意を要するといったものがみられる¹⁸。従って、ともに相手の詩を好んでいたとは言い難いにもかかわらず、野口が、初対面か共通の友人を通じて名のみしる程度であったカズンズを日本へ招聘し、カズンズもまたそれに応じたのは、国や人種を越境する双方のネットワーク拡大と強化という、共通の利益があったからかもしれない。

実際、野口に呼ばれてカズンズが来日してからというもの、二人はお互いを好意的に散文で言及している。前述したように、『新日本』と「私は現代日本の風景を切る」では、いささか皮肉めいた言辞があり、詩人同士で靈感を与え合うような交歓の類はみられなかったものの、評論などの散文ではおおむねそのようなすれ違いはみられない。野口についていえば、彼はカズンズの「タゴール訪問記」を1919年の7月29日と翌日の二回にわたって東京朝日新聞に記載し、そのなかで「文学の新発展を此の地[日本]に発見しようとして居る」としてカズンズのことを紹介した。そして1923年には、カズンズ経由でタゴール大学の紀要『ビッシュ・パロティ・クォーターリー』を読んだ野口は、直接、タゴールに詩と書簡を送り、同誌の十月号に野口の詩が掲載されることとなった¹⁹。それに恩義を感じたわけではないだろうが、野口はアイルランド文学運動について論じた『愛蘭情調』(1926)の文中で、カズンズは、イエイツとエー・イー(ジョージ・ラッセル)に次いで言及すべき人物として破格とも思える扱いをしている²⁰。実際、野口は

1935年にインドへ向かうに際して、カズンズが『新日本』で「数頁を割いて私のことを書いている」おかげで、「私の名は印度南部に広く知れ渡るに至っただらう」と記している²¹。カズンズもまた『新日本』のほかにも、『作品と崇拜』(1922)中の広重についての一章で、野口の英文著作『広重』(1921)を引き、「生動を殺してしまう細部」を切り捨て、「鮮明でかつ単純な」技で写実的な美を巧みに描き出す点こそ、広重は西洋の風景画と正反対であると対比したのだった²²。

ただ重要なのは、こうした仲間褒めにとどまらず、野口がカズンズ同様に、インドとアイルランドとを同じまなざしで見つめるようになったことだろう。野口は、『愛蘭情調』の中で「愛蘭と印度を分けて考える事が出来ない」と述べ、『印度の詩人』(1926)でも「インド人を思うと同時に、アイルランド人を考えさせられる」と記している²³。むろん、それはカズンズとの交友からのみ引き起こされた実感ではないだろう。しかし、先に引いた英国外務省文書が示唆するように、カズンズの来日によって、アイルランドのナショナリストがインドへと舞台を広げ、さらに「アジア人のためのアジア」というアジア主義的な反英運動へと拡大することを英国は恐れた。この野口の一節は図らずもその予感が的中してしまったことを示している。

アジア主義の宣伝誌『エイジアン・レビュー』

とはいえ、カズンズが協力した『エイジアン・レビュー』において、アイルランド出身でインドの独立や自治に関与した運動家の記事はあるものの、アイルランドそのものを扱った記事はほとんど見られない。ここではカズンズの関与も含めて、『エイジアン・レビュー』全体について、簡単に紹介してみることにしたい。

『エイジアン・レビュー』(1920-1921)は、同じ黒龍会発行の月刊誌『亜細亜時論』(1917-1921)の姉妹誌であり、『亜細亜時論』の四巻三号(1920年3月発行)記載の広告によれば、「亜細亜の政治経済に関して日本国民の意志を外人に宣伝する唯一の機関にして亦た日本人の亜細亜研究に関する最も有益なる参考雑誌なり」という。1920年2月の創刊号から1921年の11月号まで、二年に満たない刊行ではあるが、日英の外交文書にほぼ毎号のようにその内容が要約されて登場し、注意が喚起されている。実際、1920年10月号の『亜細亜時論』は内容が不穏当と発売禁止となっている。そのせいかどうか、カズンズが一年も経たずに慶応を辞めてインドへ帰国したことについて、1920年11月17日付けの読売新聞は、インドで独立運動の煽動を疑われ、強制送還された鹿子木員信が慶応を辞職していることとあわせて、「某国政府からの圧力」ではないかと英国の関与を示唆したのだった²⁴。

ただカズンズ自身が、『新日本』や回顧録で記すところによれば、インドのベザントから帰国の電報を受け取ったからであり、英国政府の文書にも、管見の限り、そうした記録は見当たらない。たしかに来日当時のカズンズは、時事新報紙でのインタビューに触れて要注意人物として報告され、前述の野口訳の「タゴール訪問記」は全文を英訳されている。しかし、あるのは、カズンズが帰国命令を受けて後、日本での成果として、東京支部の設立を報告した1920年5月20日付け『ニュー・インディア』所収の書簡を紹介し、彼はベザントに呼ばれて帰ったのだということが指摘した報告書のみである²⁵。またカズンズによれば、慶応大学は彼にもう一年の講義を希望し、妻のマーガレットを英語や音楽の講師として呼び寄せることも示唆したという²⁶。

そもそも『エイジアン・レビュー』は、アジア主義とりわけインドの独立運動に好意的な記事は多いものの、『亜細亜時論』に比べるとその論調はまだ穏やかであり、日本やインドの文化の紹介記事にも多くのページが割かれている。カズンズと同様に、編集顧問であったフランス

人のポール・リシャルは、英語ができないロマン・ロランのためにインド関係の記事を紹介するなどした情報協力者でもあったが、カズンズと会ったのは、1919年の6月30日のことだったという²⁷。ポール・リシャル、そして妻のミラ・リシャルは、宗教家オーロビンド・ゴーシュの機関誌『アーリヤ』(Arya)の共同編集長であったので、カズンズは以前から知っていたと記している。この『アーリヤ』の広告は、リシャル夫妻の名と共に『エイジアン・レビュー』にしばしば登場するが、そもそもリシャル夫妻が来日したのは、1916年5月のことだった。ほどなく大川周明と親しくなり、最初は東京の茗荷谷に住んでいたが、1919年から1920年に神戸からインドへ向かうまでは、千駄ヶ谷にある大川周明の屋敷で同居していたという²⁸。その間にポール・リシャルは、内田良平や葛生能久といった『亜細亞時論』にも関わっていた右翼の思想家と親交を結んでいったため、おそらく『エイジアン・レビュー』にも関わるようになったのだろう。『エイジアン・レビュー』の誌面にポール・リシャルが総特派員(General Correspondent)とあるように、カズンズが文芸担当なのに比べて、リシャルの方がはるかに黒龍会の主張に共鳴していたことは明らかである。『亜細亞時論』には、アジア連盟を呼びかけるようなリシャルの政治的な記事がいくつも掲載されているが、『エイジアン・レビュー』にそうした記事を寄稿することはなく、掲載されたのは、たとえば『永遠の智慧』といった、宗教思想の格言集であった²⁹。そうした『亜細亞時論』と『エイジアン・レビュー』の違いは、表紙に如実に表れている。



図2 『亜細亞時論』第1巻第1号(1917年7月)と第3巻第9号(1919年11月)

図2の左は1917年7月の創刊号の『亜細亞時論』だが、黒龍会の通称の通り、黒い龍が旭日を背景にして、今にも襲いかかろうとするかのように立ち上がっている。日本の絵画では右が東で左が西を指すことが通例だが、その伝に従えば、西洋を見据える東洋という隠喩を読み込めるかもしれない。黒龍会はもともと黒竜江ことアムール川にちなむ名称だが、先の英国外務省の文書でも指摘されているように³⁰、ブラック・ドラゴン・ソサエティーという通称を認めていた。この黒龍の表紙は編集長が交代するまで使用され、1919年11月号になると、こうしたアジア脅威論の刺激を自粛するかのようになり、図3右の愛らしいタツノオトシゴが以降の号では使用されることになる。ただタツノオトシゴが表紙の1920年10月号が発売禁止となってからは、再発行された1921年1月号の表紙で、再び黒い龍が登場し、7月号、10月号も同様にとぐるを巻く黒龍を使用した後、終刊に至る。そして龍であれ辰であれ、顔は一貫して左を向いていた。

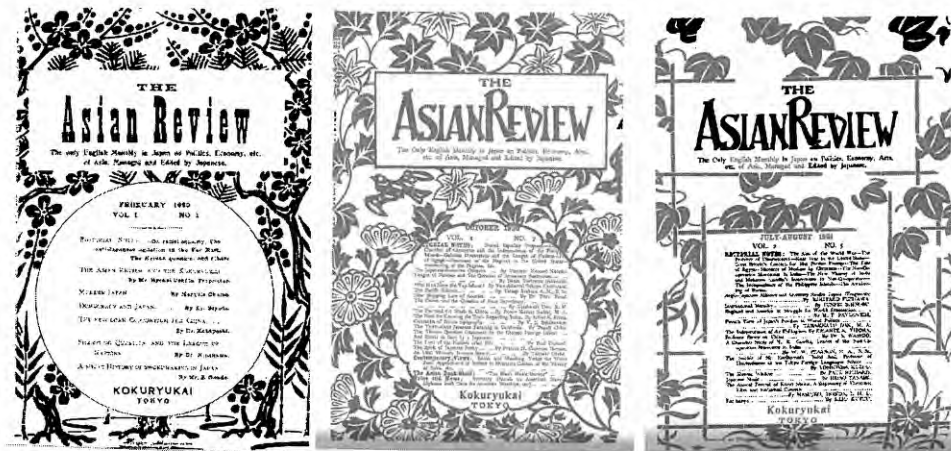


図3 左から 創刊号1920年2月号, 1920年10月号, 1921年7-8月合併号

一方、『エイジアン・レビュー』の表紙は、アジア主義の主張が明確な『亜細亜時論』とは対照的に、欧米のジャポニズムや東洋趣味を強く意識した内容となっている。図3にみるこれらの表紙は、世紀転換期を中心に欧米各地で流行していた着物や壁紙、型紙などの図案を思わせずにはおかない。とはいえ、これらの表紙は、一見、美的に擬態しているものの、リチャードとカズンズという両編集顧問がインドに近いせいもあって、『エイジアン・レビュー』には、インドに関する記事が多いことを考えれば、そこにアジア主義的なメッセージを深読みすることは可能だろう。というのも、これはまた織物の図案であり、織物とりわけ原料の綿花こそ、日印貿易の要だったからである。世紀転換期にインドの綿糸が大幅に日本へ輸入され、同時にインドに向けて日本製綿製品の輸出が増加した結果、1910年代から20年代にかけて、日英では綿業競争が引き起こされることになる³¹。たとえば、1911年以降、日本郵船は、政府の保護援助金を背景にして極端な低運賃でカルカッタ航路に参入し、ダンピング競争が始まった³²。『エイジアン・レビュー』に広告を寄せている日本郵船、大阪商船、それに茂木商店は、そんな綿業競争の当事者であり、こうした日本的な図案をインド引いては世界に流布させることに無関心ではなかったはずだ。日本製絹織物が1905年頃のボンベイでパルシー教徒用のサリーや、ビルマではターバンやネッカチーフに市場を見出したように³³、1910年頃から高島屋など日本の百貨店が、キモノ・ファッションが流行する英国向けに安価なキモノを販売しており³⁴、こうした日本風の図案をアジアでひいては世界で親しませることは、『エイジアン・レビュー』の編集方針とも合致する。

ことインドについていえば、更紗ことチンツも関連づけられるかもしれない。泉鏡花がその名も「印度更紗」を発表し、永井荷風が『珊瑚集』の序文で、いわば貿易赤字を防ぐために、幕府が紅毛国のもたらす印度更紗を禁止したと記したのが、1913年のことだった³⁵。インドの織物が、オランダなどの手を経て、徳川の日本で印度更紗として珍重されていたことに関心が高まる一方で³⁶、『エイジアン・レビュー』が創刊された同じ年には、農商務省商務局の『英領印度及蘭領印度ニ於ケル工芸品図案調査報告』(1920)で、インド向けの織物の図案について、インド固有の図案へ注意が喚起されている³⁷。一方、英国ではインドの更紗が、チンツと呼ばれ、元々、手書きで彩色された織物だったのが、インドから輸入した原料を機械でプリントすることで、インドへと大量生産されることとなった。その結果、従来のチンツ産業は大いに苦境に

立たされるのだが、これら『エイジアン・レビュー』の表紙からは、そんな英国中心のチンツを、日本（趣味）を基底にしたデザイン製品により、アジア共有の財産として奪い取ろうという意図もまた読み取れるかもしれない。

ただカズンズとはいえば、『エイジアン・レビュー』に寄稿した記事において、日本にさして肯定的な評価を与えていない。野口の洋服姿に失望したように、カズンズは当時の日本を、西洋化の果てアジア的な靈性を喪失した反面教師とみなしていたようである。インドの現代絵画についての論説では、1896年に、ハヴェル(E. B. Havell)がカルカッタの美術学校長に就任したことで、サウス・ケンジントン直伝の英国風美術教育が改められ、先祖伝来のアジャンタ石窟画が模範とされるようになった重要性を強調する一方で³⁸、当時の日本絵画については美しいことは認めつつ、精神性の欠如ゆえに評価できないとしている。具体的には、1919年に展覧された横山大観の梅の精の絵（おそらく第六回院展「羅浮仙」のことだろう）について、梅の「精」は美女でこそあるが、その「精神性」は描かれていないというのである³⁹。同様の批判は、『新日本』で大観を訪れた時の記録でも繰り返しており、それに対して大観は「日本人には創造性はありません、作らず、考えず、ただ同じ題材を繰り返すことに喜びを感じるのです。日本の美術はその技にあります。理念についてはインドを仰ぎます」と答えたという⁴⁰。カズンズは、この大観の言葉と、「日本人には好奇心がない、だから発明も創造もできない」という野口の言葉とから、インドの精神性こそがアジアのひいては日本を統合する源であることを納得するようになるのである⁴¹。

カズンズと久米民十郎

靈的なインドこそがアジアあるいは世界を統合する要となるという、カズンズの主張は、その神智学思想と密接に関係している。それはカズンズが評価した事実上、ただ一人の芸術家が画家の久米民十郎であることからもうかがうことができる。このきっかけは、カズンズの講義を聞きに慶応大学を訪れた若い男だった。日本人と英国人のあいだで生まれた彼は、第一次世界大戦に従軍し、生と死の問題を深く考えざるをえなくなった結果、ロンドンの神智学協会に惹かれるようになり、そのときにカズンズの名前を知ったという。帰国してみると、そのカズンズが東京で教えていることがわかり、大学を訪問して来たというのである⁴²。経歴から考えて、この男はひょっとするとフランシス・プリנקリーと田中安子との息子であるジャック・プリנקリーであるかもしれない。プリנקリーは、後述するように、カズンズが設立した東京支部の神智学徒の初期メンバーであるので、このころに接触があったとしても不思議ではない。

いずれにせよ、カズンズは、その男に紹介されて、代々木にある久米民十郎のアトリエへ訪問することになる。男は渡欧前から久米の友人だったそうなのだが、最近の創作で困惑するような経験をしており、見てきて欲しいと頼まれたのだった。大きな梅の木が咲き誇っていたというので、1920年の2月くらいのことだろうか。そこには描きかけのものも含めて、いろいろな絵が掛けられていたが、雑多であるにもかかわらず、カズンズをとらえて離さない統合的なヴィジョンが共通しており、なかでも一枚の絵に引き付けられることになる。

その油絵は、無数の頭、腕、手、足、燃えさかる松明、それに散らばった焰と血とがいつしよくたになって、まるで混沌としているように思えた。しかし、じっくり見てみるとはっきりした形がみえてくる。とはいえ、ただの一つとして完全な形になるものがあるわけではない。この絵はちょうど何か具体的なものが絶対へと向かってばらばらになって飛翔

していく（と想像できるような）ある瞬間の宇宙の変化を切り取ったように思えたのだ⁴³。

そこでカズンズは、画家にその意図を聞き、それが人間の苦闘を抽象的に描いたものと知り、心から画家に賛同しながら、ここでは記すことができない意見交換をしたという。そして「純粋な精神のヴィジョンの頂上に立つとき、私は画家ではなくアーティストになる」といった彼の信条を書き留めている⁴⁴。久米については、後に『作品と崇拜』のなかでもカズンズは一章を割いており、そこでも彼の描く苦闘は、理知的なキュビズムや未来派の冷たさとは異なり、「天界では万物が人格化されている」という秘密が描き込まれていると、さして説明しないまま手放しで賞賛している⁴⁵。さらにアイルランドのエー・イーの詩、ロンドンのジョン・フォウルズの音楽、そして東京の久米の絵画と、それぞれの芸術が統合され、久米の信条であった「いつの日か、私は精神と精神の純粋な交渉を表現する」という夢が共有されていることを指摘している⁴⁶。エー・イーとフォウルズがともにカズンズの友人であり、神智学徒であることは偶然ではないだろう⁴⁷。カズンズのいう精神性は多分に神智学徒への身びいきないし共感に左右されていることはまず間違いなく、たとえば『エイジアン・レビュー』で、例外的に日本で聞いた作曲家のなかで特記しているのは、山田耕筰とその「青い焰」であるが、それは神智学徒であったスクリャーピンを思わせるからであった⁴⁸。事実、山田はスクリャーピンの音楽に衝撃を受け、彼に捧げた曲を作曲していたが、たとえそれを知らなくとも「青い焰」に、その影響を聞き取ることはけっして難しいことではなかっただろう⁴⁹。

一方、カズンズの訪問から数ヶ月後の4月30日と5月1日に、久米は帝国ホテルで初めての個展を開催する。興味深いのは、そのとき出品された三十点が「霊媒画」として提示されたことである。1920年5月1日付け東京朝日新聞には、その方法が久米の談話とともに紹介されており、それによれば久米は「精神統一をして靈感によりて描くが為に非常に健康を害したので」、最近では巫女を使って催眠術をかけ、紙と筆を与えて書いたものに久米が「無念無想の境に入って只色を見る」ことで、その瞬間に体感した色を塗るようにしているのだという⁵⁰。このあと、久米はそうした「自己と宇宙との霊媒」による「超人的製作」を、エーテルにちなみ「レーテルズム」と名付け、「宗教的浄我の境地に於いて体験したる Aura を「思想の形状及色彩」として発表したベザントに触れている⁵¹。これはまぎれもなくベザントとリードビーターが著した『思念体』(Thought Forms, 1905)の主張とあってよいだろう。その挿絵には、彼らが見たと称する虹のようなオーラや思念が描かれており、技術こそ稚拙ではあるが、久米の方向性とは共通する点が多い。創作で困惑する経験をした久米に対して、おそらくカズンズは、ベザントのこの著作を紹介し、それが「霊媒画」の談話や、「レーテルズム」につながったのではないだろうか。



A LADY BY TAMI KOUME

図4 カズンズ『新日本』より「タミ・クメによる貴婦人」こと「富者の恋」(1919)

久米は、1920年から1923年まで欧米を外遊するのだが、こうした「透視」により見えないものを見えるようにする「霊媒画」は、『思念体』や神智学に多大な影響を受けたカンディンスキーを始め、同時代の抽象画家にはしばしば見られることであったため、奇矯なオカルト趣味というよりは、何らかの形で共

通言語として久米に利したとは考えられよう⁵²。

しかし、カズンズはその衝撃の抽象画を引用することはなかった。代わりに『新日本』に掲載されているのは、「タミ・クメによる貴婦人」と題された、むしろ古典的な肖像画である。この絵は1919年10月の帝展に出品された「富者の恋」であり、ポーズをとる久米の背景として、野口の友人でもあったアルヴィン・ラングドン・コバーンが1910年代と一緒に撮影した写真があるのだが、それとの関係は不明である⁵³。ただ、その女性の顔が、先に述べたジャック・ブリンクリーの妹稲・ブリンクリーとよく似ており、裕福な彼女とのすれ違いが志賀直哉の「大津順吉」(1912)で描かれているように、何らかのモデルとなった可能性をここではあわせて指摘しておきたい。

神智学協会東京支部の設立

カズンズは誰とどのようにして神智学協会の東京支部を設立したのか、『新日本』には詳しい記述がない。神智学へのシンパシーが明らかになると、インド問題の関係で尾行や調査などの対象になる恐れもあったからだろう、そもそも『新日本』では神智学徒が名指しされることはない。ただ『新日本』によると、きっかけは慶応大学から与えられた「教育における宗教」という公開講座だったという。カズンズは喜んで応じるものの、あいにく聴衆はこれまでに比してごくわずかしか現れなかった。しかし、それだけに彼らは熱心で、同志も広がり、とうとう1920年2月14日、東京支部を結成することになったというのである⁵⁴。それが回顧録ではいくぶん異なった話になっている。カズンズの講義のあと、一人のインド人学生と二人の韓国人学生が訪れて、雑談をしていたところ、そのインド人と友人が精神的に孤立しており、彼らのたつての頼みで支部を設立したという⁵⁵。

カズンズの書簡を含め、アディヤールの神智学協会本部の調査が目下、困難なため、詳細は不明ながら、『新日本』にある2月14日という日付は正確なものと思われる。本部記録を調査できた唯一の先行研究により、カズンズが本部に宛てて設立報告した手紙の日付が、1920年2月15日だからである⁵⁶。カズンズは、それから一ヶ月ほどした3月28日には日本を離れてしまうので、運営は支障を来したと思われるが、次の報告は前述したジャック・ブリンクリーから送られている。1920年5月12日付であるので、ブリンクリーはカズンズによる運営体制を引き継いだのだろう、おそらくそれほど信頼関係があつてのことゆえ、『新日本』で久米を紹介したという男が彼である可能性はここからもうかがえる。このブリンクリーによる本部宛書簡には、21名の名前があがっているというが、全員の氏名は記載がなく、確実に同定できるのは、今東光・和海の父である今武平(Captain B. Kon, キャプテンとあるのは日本郵船の船長であつたため)、そして鈴木大拙夫妻である。そして、次にブリンクリーが本部に宛てた9月25日付の書簡によると、鈴木大拙(T. Suzuki)が支部長となり、評議員(Committee)として、大拙の夫人であるベアトリス・鈴木、G・C・シン(Singh)、そしてブリンクリーの名が挙がっている⁵⁷。この新体制により、カズンズが敷いた路線に大きな変更が見られたことが、予想できるだろう。そのせいか、以降、支部活動は困難を極め、1923年になると、当初のメンバーであつた K・R・サバルワル(Sabarwal)が、東京支部の消失を報告している。彼は今後どのように活動していけばよいかと、裁可を仰いだのだ⁵⁸。

設立後、二ヶ月もしないうちに帰国してしまつたとはいえ、多様な人材を結集させたカズンズの才能は驚くべきことと言わねばならない。滞在中、カズンズは、同人誌『詩王』の一員となつたが、いみじくも同人の西条が「私の眼に映じた日本滞在中のカズンズ氏は、芸術家とし

てよりも、寧ろその信仰の宣伝者であった」と回顧したように⁵⁹、カズンズは機会あるごとに人脈を広げ、神智学支部の設立に奔走していたと思しい。いいかえれば、来日する前から詩が翻訳されるなど、「かなり有名だった」とカズンズは自負しているものの⁶⁰、その詩人としての影響は、微々たるものであった⁶¹。アイルランド文学熱が日本で高まるなかの来日ではあったが、それに裨したことはほとんどなかったといえる。ダンセイニを翻訳した松村みね子こと片山廣子を、野口に紹介されたという興味深い記述が『新日本』にはあるものの、さしたる交感はみられなかったようで、わずか教行で終わっているのは残念というほかない⁶²。その時に松村に依頼されて、カズンズは彼女の訳書に序文を送ることになるのだが、英文のままであることが示すように、これとてさして波紋をよばなかったようだ⁶³。そもそもカズンズは、当時のアイルランド文学趣味を冷ややかな目で眺めていた。山田耕筈の「青い焰」についてはスクリーピンの反響を聞き取ったものの、西洋文化を模倣する才能があまりに器用なため、アイルランドの戯曲が日本語で上演されていても、「自分の子供ともいうべきそれらの演劇をおよそ父たちは認知できないだろう」と皮肉るように記している⁶⁴。ある英文学の教授が述べたという、日本には東西を統合する使命があるという意見を紹介したあとでの説明なので、そうした混交は統合とはほど遠い劣化しかもたらさないということなのだろう。逆に回顧録では、こうした臆面のないアイルランド文学趣味を剽窃の一種として容赦なく批判している。同じ教授なのかどうかは不明だが、同僚の英文学の教授が、初演という自作の戯曲に招待してくれたものの、それがジョージ・バーナード・ショウの翻案したものであり、日本語での説明が不要だったというのである⁶⁵。

こうした冷淡さゆえ、アイルランド文学者あるいは詩人として、カズンズはさしたる足跡を残さなかったのかもしれない。しかし、上記の神智学徒を通してカズンズが与えた間接的な影響と重要性はもっと知られてよいだろう。たとえば今東光・和海の著作に、神智学の影を見出すことは難しい作業ではないはずだが、それは川端康成など、今の周囲にいたほかの作家達についてもいえることかもしれない。比較的有名なサバルワルにしても、志賀直哉、井伏鱒二、武者小路実篤、谷崎潤一郎、佐藤春夫らと交友しており、夢野久作や永井荷風の日記に登場する



図5 カズンズ『新日本』より「グルチャラン・シンによる印日中の壺」

るほか、いくつかの小説のモデルとなり、本人もまた翻訳などを寄稿したことはつとに知られている。とはいえ、その足跡を神智学との関連も含めて全貌をとらえなおす作業は、まだこれからといえるだろう⁶⁶。たとえば黒龍会にかくまわれた関係で、夢野久作の『外人の見たる日本及日本青年』(1918)がサバルワルを念頭においているとは指摘があるが⁶⁷、最晩年の短編「冥土行進曲」(1936)に登場するサバダシャイロックこと日印協会理事の須婆田車六もまた、ちょうど同じ頃、サバルワルが女性問題と諷報活動の嫌疑で報道されていたことを考え合わせると何らかの関連があるのかもしれない⁶⁸。

このように神智学という神秘思想を日本にもたらしたカズンズだが、これまで見てきたことから明らかなように、久米民十郎という例外を除いて、カズンズは当時の日本を高く評価していなかった。しばしば喧伝された東西文明の統合をそこにみるよりも、西洋化による東洋の靈性の衰退を読み取ったのである。彼を迎えた野口米次郎の洋装から始まり、その待ち合わせ場所で

あった東京駅も同じ点から批判されている。こうした文明化を日本の冒涇と考え、東洋的精神性の優越を説くカズンズの主張は、一部のアジア主義者の好むところであり、『エイジアン・レヴュー』の編集を依頼されたのもそうした理由であったからかもしれない⁶⁹。しかし、カズンズは、ラフカディオ・ハーンこそ愛読したものの、日本の文化に深く共感することも理解することもなかった。例外的に評価したのは能だが、これまでの例同様に、カズンズにとって近い神智学ならぬインドの影響がみられたからである⁷⁰。戸川秋骨と野口米次郎とで能を見て、翻訳を思い立ち、戸川によれば一緒に「半薔」の翻訳をすることになったそうだが、突然の帰国のため立ち消えになったという⁷¹。たしかにギリシア劇との類似を述べるなど、パウンドやイエイツにみる能の評価をなぞっているところもあるが、あくまで表層的な理解でしかない。事実、『新日本』では、「能の舞」として挿絵が引用されているが、これは『エイジアン・レヴュー』で静御前の舞を説明する際に使用された挿絵である⁷²。

しかし、カズンズは、一人の神智学徒に導かれて、日本にみるインドの残響だけにとどまらない、「アジアの文化的統一性」を実感するに至る。その人物こそ、『新日本』でその作品の写真が掲載されている、インド人陶芸家グルチャラン・シンである。彼はしばしば日本で G. C. Singh と署名することがあったため、前述の書簡にあった東京支部評議員のシンは、グルチャラン・シンと考えてまず間違いあるまい。1919年の夏から陶芸を学びに日本を訪れていたシンは、バーナード・リーチや柳宗悦といったカズンズの知己と親しく⁷³、その影響もあって、図5のようにリーチや朝鮮半島の陶磁器を思わせる作品を製作するようになっていた⁷⁴。カズンズの急な帰国ともない、日本語が達者なシンは、その帰国するカズンズに奈良の法隆寺を案内したのである。そこで岡倉天心の『東洋の理想』(1903)が指摘するアジャンタの石窟画が、中国と朝鮮半島を経て法隆寺へとたどり着いたことを、ひいては「アジアの文化的統一性」を、カズンズは強く実感することになった⁷⁵。というのも、岡倉が説き起こしたアジャンタから法隆寺への歴史が、グルチャラン・シンの作品に体现されていることに、つまり「アジアの文化的統一性」がまさに息づいていることに気づかされたからである。図5の作品は、梅瓶という中国の型を模し、日本の土を使い、インド人の手によって作られたゆえ、両者は時代を超えて、「アジアが一つである」ことを示しているというのだ。カズンズは、このようにシンの作品を高く評価したのだが、その後の著作で、シンについて詳しく述べることはなかった。1922年、シンはインドへ帰国するが、その後の両者の関係もまだよくわかっていない。

おわりに

カズンズの日本滞在は、1919年5月28日から1920年3月28日までと短いものだった。しかし、その間に、カズンズは、慶応義塾大学で英文学を講じ、そこでの人脈を使って、神智学協会の東京支部を1920年2月に設立した。カズンズはまもなく帰国してしまうが、設立によってもたらされた人脈の広がりには、その後、さまざまな形で反響を引き起こすことになった。その点で、カズンズと彼を招聘した野口米次郎との関係は、詩人の交流というよりも、国や人種にとられない人脈の拡大という点こそ重要というべきだろう。例外的に評価したのは、久米民十郎であり、久米がカズンズの帰国後に展開する霊媒を利用した作画というのは、ベザントの『思念体』の影響が色濃く見受けられる。一次資料が十分に公開されていないため立証に限界はあるが、カズンズがインドの日本との間につないだ人脈の網の重要性はもっと知られてしかるべきだろう。たとえばインドへの帰途でのカズンズは、元アメリカ公使であり、神智学徒となった伍廷芳(Wu Ting Fang)から香港で面会を申し込まれている⁷⁶。ほかにも、東京の神智学協会に

はグルチャラン・シンとも親しかった朝鮮半島出身の神智学徒が参加しており、こうしたアジアに広がるネットワークの解明は今後の課題だろう。

一方、『アーリヤ』を編集していたリシャール夫妻との縁からカズンズは、黒龍会の英文雑誌『エイジアン・レビュー』の編集を手伝い、インドの絵画や日本文化についていくつかの記事を寄稿した。カズンズの日本理解はインドと神智学が中心にあり、そのためおそらく期待されていたであろうアイルランド文学や詩の交流といった点では、目立った足跡を残さなかった。およそカズンズが「アジアは一つ」というアジア主義的なスローガンを実感したのは、帰国直前のことであったが、その結果、カズンズが展開することになるアジア文化論については、別の機会に論じなくてはなるまい。

なお冒頭で引用した藤村の「ある日の対話」は、カズンズがアメリカからの帰途で日本へ立ち寄った際に、「客」が彼に会いにいったときの逸話があとに続く。それによれば、カズンズは「私はアメリカの若い人にこういうことをいってきました。「すべてのことをシンプリファイすることが大切です。それは外のものにたよらないで自分の理性と感情でクリエートすることです。」と語ったという⁷⁾。これは詩についての言葉なのだが、むしろカズンズの活動にこそ当てはまることかもしれない。強引とも思える単純化をほどこすことで、異質なものを共存させ、つなぎあわせていったからである。

註

- 1 本稿は、2012年10月2日に大阪大学文学研究科で行われた阪大比較文学会シンポジウム「英国、インド、日本をめぐるアジア主義とジャポニズム」での口頭発表「アイルランド神智学者のアジア主義—ジェームズ・カズンズの滞日活動とその余波」に大幅に修正を加えたものである。当日、貴重な発表およびコメントをいただいた堀まどか氏、赤井敏夫氏、鈴木暁世氏、山田晃子氏には、ここに改めて感謝したい。
- 2 『藤村全集』第13巻(筑摩書房, 1967), p.150, pp.151-2. なお旧仮名遣・旧漢字は、以降同様に新表記に改めた。
- 3 James H. Cousins, *New Japan* (Madras: Ganesh, 1923), p.1. および「カズンズ教授来著」『三田評論』264号(1919年7月), p.30.
- 4 「カズンズ博士 印度学界最高の名誉を与えらる」『三田評論』451号(1935年3月), p.6.
- 5 James H. Cousins and Margaret E. Cousins, *We Two Together* (Madras: Ganesh, 1950), p.342.
- 6 野口米次郎『私は現代風景を切る 感想集』(新潮社, 1928), pp.46-47. 続く引用は p.48, pp.57-58, p.60. ここで野口が紹介しているカズンズの「日記」に該当する記述は、管見では原文が見当たらない。カズンズの『新日本』は日記形式で書かれ、若干共通している所もあるが、野口の記述と対応する箇所はみられない。野口が不正確に紹介している可能性もあるが、カズンズは日記を草稿として野口に見せて意見を聞いたあと、『新日本』へと編集した可能性も考えられよう。
- 7 なお『新日本』は刊行後まもなく『三田評論』で、カズンズの初講義の場面が抄訳されているが、これはおそらく『新日本』の最初かつ唯一の邦訳である。ジェームズ・エエイチ・カズンズ「ケーオー追想記」(相曾博訳)『三田評論』312号(1923年7月), pp.55-58. ほか慶應義塾大学との関連では、William Joseph Snell, 'James Cousins and Sherard Vines at Keio University: 1919-20; 1923-28 Part One' 『日吉紀要・英語英米文学』第49号

- (2006)pp.129-46を参照。
- 8 Cousins, *We Two Together*, p.349.
 - 9 Cousins, *New Japan*, p.12.
 - 10 Cousins, *New Japan*, p.54.
 - 11 カズンズの伝記事項については、William A. Dumbleton, *James Cousins* (Boston : Twayne Publishers, 1980)、インドとの関連では Dilip Kumar Chatterjee, *James Henry Cousins : a Study of His Works in the Light of the Theosophical Movement in India and the West* (Delhi: Sharada Publishing House, 1994)、アイルランドとの関連では Joseph Lennon, *Irish Orientalism: a Literary and Intellectual History* (Syracuse, N.Y. : Syracuse University Press, 2004)などがあるが、日本での活動についてはほとんど触れていない。例外的に David Burleigh, 'James Cousins (1873-1956): Rumours of the Infinite' in Hugh Cortazzi (ed.), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, v.7 (Leiden: Global Oriental, 2010)および、酒井直樹、磯前順一編『近代の超克』と京都学派：近代性・帝国・普遍性』(以文社, 2010)所収のゴウリ・ヴィシュワナータン「近代との格闘—ジェイムズ・カズンズと日本・インド・脱植民地の文化」(三原芳秋訳)があるが、神智学とアジア主義の双方についての言及は十分ではない。
 - 12 外務省外交史料館所蔵 B-情-105, レファレンスコード B02130964500.
 - 13 神智学とその影響の再評価は、現在むしろ英語圏で進んでおり、以下の研究は、研究の現状と日本の事例についてもっとも多くを教えてくれる。吉永進一「明治期日本の知識人と神智学」川村邦光編著『憑依の近代とポリティクス』(青弓社, 2007)所収および同「近代日本における神智学思想の歴史」『宗教研究』84号(2010)pp.579-601.
 - 14 オルコットについて研究書は多いが、佐藤哲朗『大アジア思想活劇 仏教が結んだ、もうひとつの近代』(サンガ, 2008)が日本側の経緯と受容がわかりやすく説明されていて簡便である。またオルコットを1889年に招致する際の主要人物であった平井金三については、科研報告書『平井金三における明治仏教の国際化に関する宗教史・文化史的研究』(基盤研究(C)研究課題番号16520060代表・吉永進一, 2006)を参照。
 - 15 Public Record Office, FO 371/5350, F1053/6/23.
 - 16 詳しくは Richard J. Popplewell, *Intelligence and Imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass, 1995)を参照。
 - 17 Cousins, *New Japan*, p.272.
 - 18 詳しくは前述の2012年10月2日開催のシンポジウムでの口頭発表「鹿子木員信の仏蹟巡礼と国外退去について」で触れておいた。刊行予定の別稿を参照されたい。
 - 19 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋大学出版会, 2012), p.357.
 - 20 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』 p.235.
 - 21 野口米次郎「印度と私—渡印に際して—」(中)『時事新報』1935年9月14日
 - 22 James H. Cousins, *Work and Worship: Essays on Culture and Creative Art* (Madras: Ganesh, 1922), pp.142-3.
 - 23 堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』 p.358.
 - 24 「日本及日本人」の826号(1922年1月発行)にも同様の記述があることが、宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想 安部磯雄と鹿子木員信の場合 軌跡編』(木鐸社, 1984) p.151で指摘されている。カズンズはともかく、鹿子木について英国政府はかなり警戒していた。詳しく

は注18の別稿を参照。

- 25 Public Record Office, 前二者はともに FO 262/1420。東京支部設立の報告は、FO 371/5350, F2119/6/23.
- 26 Cousins, *We Two Together*, p.365. なお妻の Margaret E. Cousins は *The Awakening of Asian Womanhood* (Madras: Ganesh, 1922)などの著作もあることからわかるように、アジア女性の女権を拡張する運動家として名を知られていた。
- 27 Cousins, *New Japan*, p.85.
- 28 吉永進「大川周明、ポール・リシャール、ミラ・リシャール：ある邂逅」『舞鶴工業高等専門学校紀要』43, (2008), p.97.
- 29 Paul Richard, 'The Eternal Wisdom', *The Asian Review*, vol.2-5 (1921), pp.496-7 and vol.2-6 (1921), pp. 592-594. これはリシャールが『アーリヤ』誌で連載し、後に大川周明が、1924年に『永遠の智慧』として翻訳したものと同一内容と思われる。
- 30 Public Record Office, FO 371/5350, F1053/6/23.
- 31 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』(ミネルヴァ書房, 1996),p.29, p.131
- 32 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』,p.234.
- 33 杉原薫『アジア間貿易の形成と構造』,p.29.
- 34 2011年12月18日開催のジャポニズム学会第5回例会における山田晃子「20世紀初頭のイギリスにおけるファッションのジャポニズム—1900年—1916年の *Queen* を中心に—」。内容の要約と論評については橋本順光「2011年度第5回例会報告」『ジャポニズム研究』32(2012),pp.31-36を参照。
- 35 北原白秋も『印度更紗第一輯』として1914年に出した『真珠抄』で、自分の詩を印度更紗のようなものと卑下するように記している。
- 36 たとえば白木屋呉服店圖案部編纂『印度更紗模様』(1922)が展示会とともに刊行され、森鷗外が更紗の語源について序文を寄稿したところ、それを知らずにいた新村出が「更紗の語源」を『太陽』の1922年5月号に寄稿するということがあった。なお新村は、更紗がインドの地名「スラート」(Surat)にちなむという語源説に反駁し、ジャワ起源説を紹介している。鷗外のことも含め、詳しくは『新村出全集』第6巻(筑摩書房, 1973),p.174, p.176を参照。
- 37 農商務省商務局『英領印度及蘭領印度ニ於ケル工芸品図案調査報告』(1920), p.27.
- 38 James H. Cousins, 'Indian Painting', *The Asian Review*, vol.1-1(1920), p.91.
- 39 Cousins, 'Indian Painting' (ii), *The Asian Review*, vol.1-2(1920), p.177.
- 40 Cousins, *New Japan*, p.224.
- 41 Cousins, *New Japan*, pp.229-230.
- 42 Cousins, *New Japan*, pp.233-234.
- 43 Cousins, *New Japan*, pp.238-239.
- 44 Cousins, *New Japan*, p.241.
- 45 Cousins, *Work and Worship*, p.158.
- 46 Cousins, *Work and Worship*, p.159.
- 47 ジョン・フォウルズもまた神智学とインドに関心を寄せ、たとえば『三つのマントラ』(1919-1930)を作曲している。彼の二番目の妻モード・マッカシーはインド音楽の専門家であり、ベザントとも親しい神智学徒であった。妻がアイルランド出身の縁もあってか、

- フォウルズはまたケルト趣味あふれる作品も作曲している。John M. MacKenzie, *Orientalism: History, Theory and the Arts* (Manchester: Manchester University Press, 1995), pp.167-8. カズンズはというと、1914年、モード・マッカシーを通じて、イギリス時代のフォウルズと親交を結んだという。Cousins, *We Two Together*, p.235.
- 48 James H. Cousins, 'Some Elements in Modern Japanese Culture', *The Asian Review*, vol. 1-5 (1920), p.493.
- 49 カズンズは、1919年6月22日開催の「赤い鳥」音楽会を聞いたのだと思われるが、山田耕筰は演奏に際してスクリヤーピンが望み得なかったため、自曲の「青い焰」を加えて理想に近いものにしたと述べている。山田耕筰「演奏に際して」『読売新聞』1919年6月22日。
- 50 五十殿利治『日本のアヴァンギャルド芸術—くマヴォ—とその時代』(青土社, 2001), p.205.
- 51 久米民十郎「レーテルズム」(三) 1920年9月13日付け東京朝日新聞。この記事と文中のペザントの著作は *Thought-Forms* であろうとは、すでに五十殿利治『日本のアヴァンギャルド芸術』p.207で指摘がある。
- 52 Sixten Ringbom がカンディンスキーにおける『思念体』の重要性を指摘して以降、こうしたオカルティズムの影響は、*The Spiritual in Art: Abstract Painting 1890-1985* (Los Angeles County Museum of Art, 1986)展が開催されるなど、研究が相次いでいるが、久米についてはいまだ不十分な状態といえる。
- 53 『ダンス! : 20世紀初頭の美術と舞踊』(栃木県立美術館, 2003), p.143. なお、この絵を同定したのは五十殿利治氏である。
- 54 Cousins, *New Japan*, p.312.
- 55 Cousins, *We Two Together*, p.363.
- 56 Adele S. Algeo, 'Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan', *Theosophical History*, 11-3 (2005), p.4.
- 57 Algeo, 'Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan', p.5.
- 58 Algeo, 'Beatrice Lane Suzuki and Theosophy in Japan', p.5.
- 59 西条八十「詩壇雑俎 (二) カズンズ氏を送りて」『詩王』2巻4号(1920年4月号), p.31.
- 60 Cousins, *We Two Together*, p.349.
- 61 たとえばアイルランド文学に親しかった西条八十自身が、カズンズの詩そのものを論じず、その詩を訳していないところにも、当時のカズンズの詩の評価が現れているといえよう。なお『詩王』にはいくつかカズンズの詩が掲載されているが、邦訳されているのは管見では、熊田精華訳「金貨」(『詩王』1巻5号, 1919年, p.9)一編のみである。またカズンズが慶應義塾大学に博士論文として提出した *Modern English Poetry: Its Characteristics and Tendencies* (1921)は、同雑誌で西条八十が『現代英詩講話』と訳したが、ほとんど訳されず中座したままに終わった。なお『詩王』同人の柳澤健は藤村と親しかったので、おそらくそこから藤村はカズンズのことを知ったと思われる。
- 62 Cousins, *New Japan*, p.118.
- 63 James H. Cousins, Preface, 及び訳者後記 p.1, 松村みね子訳『ダンセイニ戯曲全集』(1921, 警醒社書店)。このとき、ダンセイニに邦訳許可を手紙で問い合わせたのは野口米次郎だったとも記されている。
- 64 Cousins, 'Some Elements in Modern Japanese Culture', *The Asian Review*, vol. 1-5 (1920), p.494. これはカズンズの友人イエイツが、シングに影響された菊池寛を、それと

気づかずに賞賛したことと比較できるだろう。詳しくは鈴木暁世「J.M.シングを読む菊池寛／菊池寛を読む W.B.イェイツー日本文学とアイルランド文学の相互交渉」『比較文学』53(2011),33-48を参照。

- 65 Cousins, *We Two Together*, p.353.
- 66 その生涯については、中村尚史「在日インド人の独立運動－K・R・サバルワルの回想をめぐって」田中宏編『日本軍政とアジアの民族運動』（アジア経済研究所,1983）所収があるが、神智学については触れられていない。関連する作家達については、たとえば細江光『谷崎潤一郎：深層のレトリック』（和泉書院,2004）,p.258,注29を参照。
- 67 『夢野久作著作集』第1巻(1996,葦書房)所収の西原和海「解題」p.325,p.331.
- 68 『夢野久作全集』第10巻(1991,ちくま文庫),p.293および1936年3月28日付け東京日日新聞「印度志士サバルワル恩を仇のスパイ行為」を参照。
- 69 たとえば、高須芳次郎『日本は世界を征服せん』（先進社,1931）,p.67では、東京駅でのカズンズの悲嘆が同じ意図で引用されている。
- 70 Cousins, 'Some Elements in Modern Japanese Culture', *The Asian Review*, vol. 1-5 (1920), p.495.
- 71 戸川秋骨『英文学覚帳』（大岡山書店,1926）,p.317.
- 72 Cousins, *New Japan*, p.74.
- 73 カズンズは、神秘思想への関心もあってリーチおよび柳を好意的にとらえていた。Cousins, *New Japan*, pp.81-85, pp.273-4を参照。まもなく帰国したリーチに宛てて柳も1919年8月6日付けの手紙で「カズンズ氏の詩が気に入っています」と報告している。『柳宗悦全集』第21巻上 英文書簡(筑摩書房,1989),p.50. 邦訳(p.228)では「カズン氏の作品の線」とあるが、ここでいう'lines'はおそらく詩のことではないか。
- 74 詳しくは、橋本順光「인도 도예가 구차란 싱」,백조중 編著『한국을 사랑한 일본인 : 아사카와 다쿠미의 삶과 사랑』(부코,2011)所収,pp.78-90および同「浅川巧とグルチャラン・シンーインドまで伝えられた韓国陶磁器の美」,『時代の国境を越えた愛 浅川巧の林業と韓国民族工芸に関する研究』ソウル国際親善協会浅川学術会議報告書(2011),pp.120-131を参照。グルチャラン・シンは、当時日本で活躍していた建築家であり神智学徒のアントニン・レーモンドとも親しかったが、カズンズとの関係はいまだよくわかっていない。ただカズンズは、レーモンドやシンが参加していた三田平凡寺の我楽多宗の一人フレデリック・スタールに会ったことは記している。Cousins, *New Japan*, pp.170-171.
- 75 Cousins, *New Japan*, pp.319-322.
- 76 Cousins, *We Two Together*, pp.368-369.
- 77 『藤村全集』第13巻,p.152.

(担当研究者・はしもとよりみつ・大阪大学大学院文学研究科准教授・比較文学)